

斜距離, 斜角を新しい観測方程式にして, 2~4 km以内の小地域に適した3次元測量を可能ならしめると共に, 同じ方程式が水平距離と水平角にも適用されるように仕組み, 平面座標に関しては, 従来の平面測量用観測方程式(地理院方式)と同等以上の精度が出ること確かめた。与え2次の3次元後方交会法など新しい各種の測量方式が可能となるので, これらを実測によって検証し, おおむね所期の成果を収めることができた。

1. 観測方程式編成の基本方針

- 1) 観測値 φ_i の最確値 $\bar{\varphi}_i$ を各測定の最確座標値 $\bar{x}_i, \bar{y}_i, \bar{z}_i$ を用いて演算する「最確値式」 $\bar{\varphi}_i = F(\bar{x}_i, \bar{y}_i, \bar{z}_i)$ 要。
- 2) 各測定の略近座標値 x_i, y_i, z_i (既知)に対する修正量を x_i, y_i, z_i とすれば最確座標値を $\bar{x}_i = x_i + x_i, \bar{y}_i = y_i + y_i, \bar{z}_i = z_i + z_i$ と表わすことができるので, これらを「最確値式」へ代入して「最確値関数」 $\bar{\varphi}_i = f(x_i, y_i, z_i)$ を作る。

- 3) 「最確値関数」へ $x_i = y_i = z_i = 0$ を代入した値を φ_{0i} として, 「最確値関数」を x_i, y_i, z_i についてTaylor展開する。このとき x_i, y_i, z_i の2次以上の部分, および第2次導関数以上の高次項を無視すれば

$$\bar{\varphi}_i = \varphi_{0i} + \sum \left\{ \left(\frac{\partial \bar{\varphi}_i}{\partial x_i} \right)_0 \cdot x_i + \left(\frac{\partial \bar{\varphi}_i}{\partial y_i} \right)_0 \cdot y_i + \left(\frac{\partial \bar{\varphi}_i}{\partial z_i} \right)_0 \cdot z_i \right\} \quad (1)$$

- 4) 一方 $\bar{\varphi}_i$ を観測値 φ_i とその補正量 v_i で示せば $\bar{\varphi}_i = \varphi_i + v_i$ (2)

式(2)を式(1)へ代入して整理すれば, (導関数の添字 $_0$ は $x_i = y_i = z_i = 0$ を入れて値を定める意)

$$(\varphi_i - \varphi_{0i}) + v_i = \sum \left\{ \left(\frac{\partial \bar{\varphi}_i}{\partial x_i} \right)_0 \cdot x_i + \left(\frac{\partial \bar{\varphi}_i}{\partial y_i} \right)_0 \cdot y_i + \left(\frac{\partial \bar{\varphi}_i}{\partial z_i} \right)_0 \cdot z_i \right\}$$

- 5) こうして観測方程式(3)を得る。

$$v_i = \sum \left\{ \left(\frac{\partial \bar{\varphi}_i}{\partial x_i} \right)_0 \cdot x_i + \left(\frac{\partial \bar{\varphi}_i}{\partial y_i} \right)_0 \cdot y_i + \left(\frac{\partial \bar{\varphi}_i}{\partial z_i} \right)_0 \cdot z_i \right\} - (\varphi_i - \varphi_{0i}) \quad (3)$$

係数 $\left(\frac{\partial \bar{\varphi}_i}{\partial x_i} \right)_0$ 等の内容は略近座標計算に用いた経距, 緯距, 差高をそのまま使用できる形にまとめ, z_i 項を省略すれば簡単に平面上の方程式となるように仕組む。

2. 斜角の観測方程式

空間2直線が1点 i に会合してなす斜角 ϕ_i を直接測定する機械が無いので, 次式(4)で $\cos \phi_i$ を計算し, $\cos \phi_i$ の数値を観測値とみなす。

$$\cos \phi_i = -\sin \beta_1 \cdot \sin \beta_2 + \cos \beta_1 \cdot \cos \beta_2 \cdot \cos \theta_2 \quad (4)$$

β_1 : $(i-1)$ から i を見た高度角, β_2 : i から $(i+1)$ を見た高度角, θ_2 : i における実測水平角

β はなるべく水平角と同等の精度で測定し, 水平より上 β をプラス, 水平より下 β をマイナスとする。

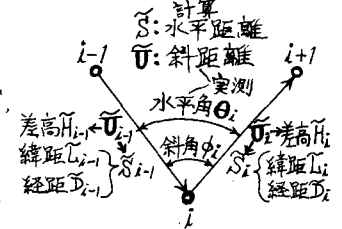
$\cos \phi_i$ すなわち「 $\cos \phi_i$ の最確値式」は次の通りである。 $\bar{x} = x + x, \bar{y} = y + y, \bar{z} = z + z$ とする。 x, y, z は略近座標値。

$$\cos \bar{\phi}_i = \frac{(\bar{x}_{i-1} - \bar{x}_i)(\bar{x}_{i+1} - \bar{x}_i) + (\bar{y}_{i-1} - \bar{y}_i)(\bar{y}_{i+1} - \bar{y}_i) + (\bar{z}_{i-1} - \bar{z}_i)(\bar{z}_{i+1} - \bar{z}_i)}{\left\{ (\bar{x}_{i-1} - \bar{x}_i)^2 + (\bar{y}_{i-1} - \bar{y}_i)^2 + (\bar{z}_{i-1} - \bar{z}_i)^2 \right\}^{1/2} \left\{ (\bar{x}_{i+1} - \bar{x}_i)^2 + (\bar{y}_{i+1} - \bar{y}_i)^2 + (\bar{z}_{i+1} - \bar{z}_i)^2 \right\}^{1/2}} \quad (5)$$

式(5)の右辺の最確座標値の代りに略近座標値を用いた「略近関数値」 $\cos \phi_{0i}$ は, x 座標差が緯距 L_i , y 座標差が経距 D_i , z 座標差が差高 H_i であることに注目して(上図参照) L, D, H の符号は図の矢印方向による。

$$\cos \phi_{0i} = \frac{-(L_{i-1} \cdot L_i) - (D_{i-1} \cdot D_i) - (H_{i-1} \cdot H_i)}{U_{i-1} \cdot U_i}, \quad U_{i-1} = \sqrt{L_{i-1}^2 + D_{i-1}^2 + H_{i-1}^2}, \quad U_i = \sqrt{L_i^2 + D_i^2 + H_i^2} \quad \left. \vphantom{\cos \phi_{0i}} \right\} \text{計算斜距離} \quad (6)$$

実測斜距離 $\bar{U}$ から水平距離 $\bar{S}$ および差高 $\bar{H}$ を求めるには次式による。 $(z_0$: 平均標高, r : 地球中等半径
 $\bar{S} = \bar{U} \left(1 - \frac{z_0}{r}\right) m \cdot \cos \beta, \quad \bar{H} = \bar{U} \left(1 - \frac{z_0}{r}\right) m \cdot \sin \beta$ (m : 縮尺係数, β : $\bar{U}$ の高度角)



緯距 $\bar{L}$, 経距 $\bar{D}$ は $\bar{\alpha}$ と水平角を用いて計算され、 $\bar{L}$ から X , $\bar{D}$ から Y , $\bar{H}$ から Z すなわち略近座標が計算される。したがって略近座標計算ルート上の路線では、式(6)の L, D, H は $\bar{L}, \bar{D}, \bar{H}$ に等しく U は $\bar{U}(1 - \frac{\alpha_0}{\rho})m$ に等しい。しかし略近座標計算ルート以外の路線では $L \neq \bar{L}, D \neq \bar{D}, H \neq \bar{H}$ であり、 $U \neq \bar{U}(1 - \frac{\alpha_0}{\rho})m$ である。一般に、式(6)の L, D, H, U は略近座標値から下式によって計算されなければならない。

$$\begin{cases} L_{i-1} = X_i - X_{i-1} & D_{i-1} = Y_i - Y_{i-1} & H_{i-1} = Z_i - Z_{i-1} & U_{i-1} = \sqrt{L_{i-1}^2 + D_{i-1}^2 + H_{i-1}^2} \\ L_i = X_{i+1} - X_i & D_i = Y_{i+1} - Y_i & H_i = Z_{i+1} - Z_i & U_i = \sqrt{L_i^2 + D_i^2 + H_i^2} \end{cases} \quad (6)$$

[注] 実測斜距離に対し、上記のように海面補正と縮尺係数を考えないと、国土地理院の基準尖に準拠した3次元測量は不可能である。ただし、これによって標高 $\bar{Z}$ に若干の系統誤差を生じることは止むを得ないが、差高が距離にくらべて小さい場合は、この標高系統誤差は無視してよい。高度角が大きく差高大なる場合は、最確 $\bar{Z}$ 座標差は $(1 + \frac{\alpha_0}{\rho})/m$ を乗じ、標高を改算すれば完全となる。

式(5)へ $\bar{X} = X + x, \bar{Y} = Y + y, \bar{Z} = Z + z$ を代入して座標修正量 x, y, z について展開し、最初(述べて一般方針に従いとりまとめた斜角(正しくは斜角の $\cos$)の観測方程式は下記のようなものである。
 $\cos \phi_i$ の補正量を V_i とする。 V_i は rad 角の観測方程式と同じに取扱うことができる。(実地計算済み)。

$$\begin{aligned} V_i = & \left(\frac{\cos \phi_{0i}}{U_{i-1}^2} L_{i-1} + \frac{L_{i-1}}{U_{i-1} \cdot U_i} \right) x_{i-1} + \left(\frac{\cos \phi_{0i}}{U_{i-1}^2} D_{i-1} + \frac{D_{i-1}}{U_{i-1} \cdot U_i} \right) y_{i-1} + \left(\frac{\cos \phi_{0i}}{U_{i-1}^2} H_{i-1} + \frac{H_{i-1}}{U_{i-1} \cdot U_i} \right) z_{i-1} \\ & - \left\{ \frac{L_{i-1}}{U_{i-1}^2} - \frac{L_i}{U_i^2} \right\} \cos \phi_{0i} + \frac{(L_i - L_{i-1})}{U_{i-1} \cdot U_i} \left\{ x_i - \left\{ \frac{D_{i-1}}{U_{i-1}^2} - \frac{D_i}{U_i^2} \right\} \cos \phi_{0i} + \frac{(D_i - D_{i-1})}{U_{i-1} \cdot U_i} y_i - \left\{ \frac{H_{i-1}}{U_{i-1}^2} - \frac{H_i}{U_i^2} \right\} \cos \phi_{0i} + \frac{(H_i - H_{i-1})}{U_{i-1} \cdot U_i} z_i \right. \\ & \left. - \left\{ \frac{L_i}{U_i^2} \cos \phi_{0i} + \frac{L_{i+1}}{U_{i+1} \cdot U_i} \right\} x_{i+1} - \left\{ \frac{D_i}{U_i^2} \cos \phi_{0i} + \frac{D_{i+1}}{U_{i+1} \cdot U_i} \right\} y_{i+1} - \left\{ \frac{H_i}{U_i^2} \cos \phi_{0i} + \frac{H_{i+1}}{U_{i+1} \cdot U_i} \right\} z_{i+1} - (\cos \phi_i - \cos \phi_{0i}) \right) \quad (7) \end{aligned}$$

式(7)から z_{i-1}, z_i, z_{i+1} の項を除けば、直ち(平面測量用の観測方程式として用いることができる。ただし

$$\cos \phi_{0i} \text{ の代りに } \cos \theta_{0i} = \frac{-(L_{i-1} \cdot L_i) - (D_{i-1} \cdot D_i)}{S_{i-1} \cdot S_i}, \quad \begin{cases} S_{i-1} = \sqrt{L_{i-1}^2 + D_{i-1}^2} \\ S_i = \sqrt{L_i^2 + D_i^2} \end{cases} \text{ を用い、} U_{i-1}, U_i \text{ をそれぞれ } S_{i-1}, S_i$$

で置きかえ、 $\cos \phi_i$ の代りに $\cos \theta_i$ (θ_i は実測水平角)を使用すべきことは当然である。

重み $\frac{\text{水平角の重みを1とすれば}}{\cos \theta_i \text{ 方程式の重み } P_{\cos \theta_i} = \frac{1}{\sin^2 \theta_i}}$ 差高 H_i 方程式 -- (平面座標と別の標高調整する場合方程式は省略)
 $\text{の重み } P_{H_i} = \frac{\frac{U_i^2 \cdot m^2}{(\sin \phi_i)^2 M_{\sigma}^2 + S_i^2 \cdot M_{\beta}^2}}$ m : 水平角の標準誤差 rad
 M_{β} : 高度角の標準誤差 rad
 M_{σ} : 斜距離の標準誤差

$$\cos \phi_i \text{ 方程式の重み } P_{\cos \phi_i} = \frac{1}{\{(\sin \beta_i \cos \beta_j - \cos \beta_i \sin \beta_j \cos \theta_{ij})^2 / \rho_j^2\} + \{(\sin \beta_j \cos \beta_i - \cos \beta_j \sin \beta_i \cos \theta_{ji})^2 / \rho_i^2\} + (\cos \beta_i \cos \beta_j \sin \theta_{ij})^2}$$

3. 斜距離の観測方程式

$\bar{U}$ すなわち「斜距離 $\bar{U}$ の最確値式」は次の通り。 $\bar{X} = X + x, \bar{Y} = Y + y, \bar{Z} = Z + z$ とする。

$$\bar{U}_i = \sqrt{(\bar{X}_{i+1} - \bar{X}_i)^2 + (\bar{Y}_{i+1} - \bar{Y}_i)^2 + (\bar{Z}_{i+1} - \bar{Z}_i)^2} \quad (8)$$

この右辺の最確値座標の代りに略近値座標を用いた「略近関数値」 U_{0i} は X, Y, Z は略近座標値

$$U_{0i} = \sqrt{(X_{i+1} - X_i)^2 + (Y_{i+1} - Y_i)^2 + (Z_{i+1} - Z_i)^2} = \sqrt{L_i^2 + D_i^2 + H_i^2} \quad (9)$$

式(8)へ $\bar{X} = X + x, \bar{Y} = Y + y, \bar{Z} = Z + z$ を代入して座標修正量 x, y, z について展開し、とりまとめた斜距離の観測方程式は (実測斜距離 $\bar{U}_i$ の補正量を $\tilde{U}_i$ とする)。

$$\tilde{U}_i = \frac{-(X_{i+1} - X_i)}{U_{0i}} x_i + \frac{-(Y_{i+1} - Y_i)}{U_{0i}} y_i + \frac{-(Z_{i+1} - Z_i)}{U_{0i}} z_i + \frac{(X_{i+1} - X_i)}{U_{0i}} x_{i+1} + \frac{(Y_{i+1} - Y_i)}{U_{0i}} y_{i+1} + \frac{(Z_{i+1} - Z_i)}{U_{0i}} z_{i+1} - \left(\frac{\tilde{U}_i - U_{0i}}{U_{0i}} \right) \quad (10)$$

角の観測方程式といつしよに使用するため(両辺を U_i で割り、 $U_i = \tilde{U}_i / U_i$ と置く。

$$U_i = \frac{-(X_{i+1} - X_i)}{U_{0i}^2} x_i + \frac{-(Y_{i+1} - Y_i)}{U_{0i}^2} y_i + \frac{-(Z_{i+1} - Z_i)}{U_{0i}^2} z_i + \frac{(X_{i+1} - X_i)}{U_{0i}^2} x_{i+1} + \frac{(Y_{i+1} - Y_i)}{U_{0i}^2} y_{i+1} + \frac{(Z_{i+1} - Z_i)}{U_{0i}^2} z_{i+1} - \left(\frac{\tilde{U}_i - U_{0i}}{U_{0i}} \right) \quad (11)$$

z の項を省略し、 $\tilde{U}_i$ の代りに $\bar{S}_i = \bar{U}_i (1 - \frac{\alpha_0}{\rho})m \cdot \cos \beta_i$ を、 U_{0i} の代りに $S_{0i} = \sqrt{L_i^2 + D_i^2}$ を用いれば、水平距離の観測方程式として平面解に適用できる。【応用】式(7)から得られる $\cos \phi_i$ 方程式と $\cos \theta_i$ 方程式は全く

重み $P_{U_i} = \frac{\tilde{U}_i^2 \cdot m^2}{M_{\sigma}^2}$, $P_{S_i} = \frac{\tilde{U}_i^2 \cdot m^2}{(\cos \beta_i)^2 M_{\sigma}^2 + \tilde{H}_i^2 \cdot M_{\beta}^2}$ 別の方程式として連立できるので、与え2点の後方交会
 で求まる $\bar{X}, \bar{Y}, \bar{Z}$ を求めるなど多くの応用が可能。